

氏 名	かわもと まさとも 川 本 正 知
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	論 文 博 第 517 号
学位授与の日付	平 成 18 年 7 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	15世紀中央アジアの聖者伝『ホージャ・アフラルのマカーマート』の 研究
論文調査委員	(主 査) 教 授 濱 田 正 美 助教授 久 保 一 之 助教授 東 長 靖

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、2004年に出版した *The 15th Century Central Asian Hagiography MAQĀMĀT-I KHWĀJA AḤRĀR — Memoirs Concerning Khwāja Aḥrār (1404-1490)—*, Compiled by A disciple called Mawlānā Shaykh, ed. by Masatomo Kawamoto, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2004年を, 第Ⅰ章 ペルシア語テキストとし, 翌年出版した マウラーナー・シャイフ編著『15世紀中央アジアの聖者伝 ホージャ・アフラルのマカーマート』川本正知訳注, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2005年を, 第Ⅱ章 訳注として併せ, 15世紀中央アジアの聖者伝『ホージャ・アフラルのマカーマート』の研究と題したものであり, 標題の書の校訂テキストと日本語訳注である。

『ホージャ・アフラルのマカーマート *Maqāmāt-i Khwāja Aḥrār*』は, マウラーナー・シャイフ *Mawlānā Shaykh* として知られる人物が, 16世紀初頭の中央アジアにおいてペルシア語で書いたホージャ・アフラル *Khwāja Aḥrār* の奇蹟譚・言行録集である。

ホージャ・アフラルとは, 15世紀中央アジアのナクシュバンディー教団の最も有名なシャイフ, ホージャ・ナーシル・ウッディーン・ウバイド・アッラー *Khwāja Nāṣir al-Dīn ‘Ubayd Allāh (1404-1490)* である。著者のマウラーナー・シャイフは彼の多くの弟子の一人であった。この著作は研究者間の通称として *Manāqib* と呼ばれてきたが, 校訂本では, 一写本の表紙に書かれた *Maqāmāt-i Khwāja Aḥrār* を著作名とし, 書名の訳として『ホージャ・アフラルのマカーマート』とした。

校訂本および訳注の出版の目的は, 研究者の間においてさえその存在も知られていなかった当書の興味深い内容を, 全訳することによって, 日本のスーフィズムおよびスーフィー教団の研究者や宗教としてのイスラムの社会的現実態に興味をもつ中央アジア史および西アジア史の研究者に紹介することであった。

だが, 筆者がそれを志した1998年当時, 当書は, タシュケントの Институт Востоковедения Академии Наук Республики Узбекистан 所蔵の3写本の存在が知られているだけであった。そこで, 1999年から, 3年間かけてタシュケント, イスタンブル, テヘランにおいてナクシュバンディー教団関係の写本調査を行い, 当書の写本を含む多くの写本をマイクロフィルムとして集めた。最終的に, インドのパトナの写本をマイクロフィルムで入手したのは, テキスト出版の3ヶ月前であったが, とにかく存在を知り得た5写本全てを参照し校訂を行い, 2004年の末にペルシア語テキストを出版した。翌年, この確定されたペルシア語テキストにより, 脚注に取られた写本間の異同を適宜参照しつつ翻訳を進め, 2005年11月, 当書の日本語訳を完成し, 年の暮れに出版することができた。また, 訳には日本語として理解するための最低限度の注も施した。

訳注の完成により, 上記の目的をほぼ達成できたものと考え, 両書をまとめて, 15世紀中央アジアの聖者伝『ホージャ・アフラルのマカーマート』の研究と題し, 学界の評価を受けるべく博士論文としてここに提出することにした。

2. ホージャ・アフラルに関する4聖者伝について

ホージャ・アフラルの聖者伝として当書を含めた以下の4点の著作が知られている。

① Muḥammad Qāḍī *Silsilat al-‘arīfīn wa Tadhikīrat al-Ṣiddīqīn*.

② Mīr ‘Abd al-Awwal, Majālis (‘Ārif Nawshāhī, *Aḥwāl wa Sukhanānn-i Khwāja ‘Ubayd Allāh Aḥrār*, compiled & ed. by ‘Ārif Nawshāhī, Markaz-i Nashr-i Dāneshgāhī, Tehran, 1380 / 2001-2, pp. 141-494).

③ Fakhr al-Dīn ‘Alī b. Ḥusayn Wā ‘z Kāshāfī, *Rashaḥāt ‘Ayn al-ḥayāat*, ed. ‘Alī Aṣghar Mu ‘iniyān, 2 Vols., Tehran, 2536 / 1977.

④ Mawlānā Shaykh, *Maqāmāt-i Khwāja Aḥrār* (当書)

この内①と②の著者は、当書にも出てくる有名な高弟たちである。

①は前書きに続いてそれぞれ修業時代、お言葉、諸奇蹟についての三つの章と後書きからなる形式の整った「聖者伝」であるが、校訂本はなく、いくつかの写本からその内容がわずかに知られているのみである。

②はその内容のほとんどは師のお言葉を記録したものであり、2002年に上記校訂本を出した校訂者ナウシャーヒー氏は *Malḥūzāt-i Aḥrār* と名づけている。かつて、最も古く書写された写本によってこの書の内容を紹介したことがある（川本「ホージャ・アフラルとアブー・サイード——ティムール朝における聖者と支配者——」『西南アジア研究』25, 1986, pp. 25-50）。

③の著者ファフル・ウッディーンは、ヘラートの人であり、有名な詩人マウラーナー・ジャーミーの義弟であるが、1484年から85年、1488年から89年にかけて2度にわたってサマルカンドのホージャ・アフラルのもとに滞在し、その時の体験と集めた資料をもとに1503年この『ラシャハート』を書いたとされるが、最近の研究によれば彼自身の体験の記録は少なく、その内容のほとんどは①と②からの抜粋であるとされている。しかし、『ラシャハート』はその第一巻がホージャ・アフラル以前のナクシュバンディー教団史となっているので、20世紀に至るまでもっともよく読まれ、中央アジアのナクシュバンディー教団史の根本資料、ホージャ・アフラルの聖者伝と言えば『ラシャハート』を指すという状態が長く続いてきた。それ故、1977年という比較的早い年代に優れ校訂本が出版されたとも言い得るであろう。

④は、チェホビチが、ホージャ・アフラルの資産に関する文書集の序文において初めて紹介するまで、一部のウズベキスタンの学者しかその存在を知らなかった著作である（О. Д. Чехович, Самаркандские документы XV-XVI вв., Москва, 1974, cc. 16-17, 23-25）。その後カザコフが、タシュケントの3写本を紹介したが（Б. Казаков, Анонимное житие Ходжи Ахрара, Источниковедение и текстология средневекового ближнего и среднего восток, Москва, 1984, cc. 103-108），それ以降も少数の研究者が時に写本から引用するにとどまり、聖者伝と呼びうるような記録であるのか、著者はどういう立場で著述しているのか、何時成立した著作であるか、また上記3聖者伝との相関関係はどうか、などについては全く分からず、歴史資料として使用することが出来ない状態で20世紀を終えた。

以上、要するに、20世紀を通して、ホージャ・アフラルの研究または15世紀以前のナクシュバンディー教団史研究は、チェホビチの出したホージャ・アフラルに関する文書集の研究を除けば、③『ラシャハート』の情報をもとにし、それぞれの研究者の接し得た聖者伝の写本の紹介に始終してきたと言えよう。

④の校訂本出版、訳注である当研究の重要性は、以上のような研究状況を踏まえれば理解し得るであろう。もちろん、テキスト出版と訳注はいかなる分野の文献学においても最も基礎となる重要な作業である。

3. 『ホージャ・アフラルのマカーマート』について

1) 写本

2004年までに存在を確認し得た以下の5写本を参照し校訂本を作成した。

(1) タシケント写本1 (T1) : ИБ АН РЎЗ, рук. № 9730, 1a-107a

(2) パトナ写本 (P) : Khuda Bakhsh Oriental Public Library, H. L. No. 2480, 1a-66b

(3) イスタンブル写本(I): Beyazit Devlet Kütüphanesi, Beyazit 3624, 1a-81a

(4) タシケント写本2 (T2) : ИБ АН РЎЗ, рук. № 8237 / I, 1a-92b

(5) タシケント写本3 (T3) : ИБ АН РЎЗ, рук. № 1883 / IV, 98b-205a

チェホビチやババジャーノフらの現地の研究者たちは、タシュケントの3写本のいずれかを、その系統などを考慮することなく使っている。また、2002年に出されたナウシャーヒー氏による当書の校訂本 (*Khawāriq-i ‘Ādāt-i Aḥrār*, in ‘Ārif

Nawshāhī, *Aḥwāl wa Sukhanān-i Khwāja ‘Ubayd Allāh Aḥrār*, compiled & ed. by ‘Ārif Nawshāhī, Markaz-i Nashr-i Dāneshgāhī, Tehran, 1380 / 2001-2, pp. 573-705) は(2)(3)だけしか見ていない。

また、5 写本全て付き合わせて校訂本を作成していく過程で様々なことが分かった。例えば、1561年以前に書写された(2)と18世紀に書写された(4)は明らかに同じ写本から写されたものである。また、1630年代に写された(1)の写本中の後に修復された部分と(5)の写本全部は、現在イスタンブールにある(3)の写本から写されたものである。このような写本間の関係を把握できたことは校訂作業の進捗を大いに助けた。

2) 著者

チェホビチは、著者を『ラシャハート』(II: 617-20)にあげられているホージャ・アフラルの弟子たちの一人の同名の人物とした。それによれば、「マウラーナー・シャイフ——至高なる神よ、彼の充実の庇護を永遠ならしめたまえ——は、イーシャーン様（ホージャ・アフラル）の偉大なる教友の一人であり、長年、かの御方の世俗の仕事（umūr dunyāwī）を任されていた。」とある。

当聖者伝の記述の独自性は著者がホージャから任されていた「農業経営その他の世俗の重要な仕事」に関係しているかもしれない。事実、当書にはホージャの所有していた農地の経営に関する簡単ではあるが重要な記述が散見している。また、その名につけられた祝福句が生きている人に対するものであるから、『ラシャハート』が書かれた909 / 1503-4年には生存していた。

1570年に書かれたナクシュバンディー教団に関する系譜『シルシラ・ナーマ』(Muḥammad b. Ḥusayn Qazvinī, *Silsila-nāma-yi Khwājagān-i Naqshband*, ms. Süleymaniye Kütüphanesi, Laleli 1381, 12a)には、「マウラーナー・シャイフは、イーシャーン様の偉大な教友たちの一人であり、シャイバク・ハーン Shaybak Khān の治世の末期に亡くなった。彼の墓は、ムハワテ・モッラーヤーン Muḥawṭa-yi Mullāyān にある。」と注記している。

シバーン朝のシャイバーニー（シャイバク）・ハーンが、メルヴにおいて死んだのが1510年12月。当書に記録されているサマルカンドの大火の年ヒジュラ暦915年は1509年4月21日にはじまる年であるので、マウラーナー・シャイフは、それ以降に起こったサマルカンドの大火のことをその年代と共に記録した後、1510年12月までに亡くなったことになる。師の死後約20年間生き、結果として当書には師の二人の息子たちの死も記録されることになった。

3) 構成

本書は、一つひとつが完結した約200の逸話の集成である。それらは、著者が多数の人びとから聞いたホージャ・アフラルと彼の親族（二人の息子たちを含む）および高弟数人についての話しと著者自身が聴いたホージャ自身が語った教説や訓話や「お言葉」の記録である。伝聞として書かれている場合でも著者自身の体験の叙述と考えられる部分もある。また、伝聞と体験が混じっているとしか思われぬ部分もある。ホージャの語ったことの大部分は、当著作中に majlis として出るシャイフの主催する修業の集会において語られ、著者が直接聞いて記録していたものであろう。

これらの節は、厳密ではないが内容的に3グループに分けられており、それぞれ章題が付けられている。

第一番目の章は、冒頭の「奇蹟の叙述 (bayān-i khawāriq-i ‘ādāt)」が章題である。

第二番目の章は、テキスト p. 71から始まる「イーシャーン様の家系の叙述」である。そこには、ホージャ・アフラルの父方・母方の先祖、従兄弟たち、姉妹たち、二人の息子たちについての逸話が集められている。

題三番目の章は、テキスト p. 97から始まり、「イーシャーン様の幾人かの教友たちの話しと高貴なる集会においてこのか弱き著者が聞いた若干のお言葉の叙述」という長い表題がつけられ、6人の弟子たちについての感動的なエピソードと著者の集めたホージャのお言葉集成との二つに分けられる。

著作名もなく、前書きも後書きも付けられていない。

節の設定や章分けはおおざっぱなものであり、資料を並べてかたっぱしから写していったかの如くである。『ラシャハート』のよく考えられた章分けとは対照的であり、3章の章題などは著者自身が付けたものとはとても考えられない。

4) 成立

以上の考察から、この書の失われた原本の成立を筆者は次のように考えた。

著者マウラーナー・シャイフは、おそらく弟子として彼の聴いたホージャの教説や言葉のメモを持っていた。彼は特に、

師の語る過去の聖者や、現在のシャイフたちの神秘的力に強く関心を持っていたようである。また、聖者の奇蹟に強い関心を持っていた著者は、特にホージャ・アフラルの神秘的な力を示す政治的な活動に関する逸話やエピソードを師の奇蹟譚として集め記録していたようである。それらの逸話の中には、著者自身の体験の記録であるものも含まれていた。

ホージャ・アフラルが君主たちと深い関係を持っていたティムール朝の滅亡、新興ウズベクのシバーン朝シャイバーニー・ハーンによるホージャ・アフラルの二人の息子たちの「殉教」をへて、著者は、メモやノートを、漠然と上述の三部構成でまとめ、師の聖者伝の草稿のようなものを書こうとしていたが、書物としては完成を見ずに亡くなった。

著者の死後、まだ書名もなく序文も後書きもなかったこの「草稿」が、冒頭の短い序文を書いた人物によって一書として編纂された。第1章の章題に関係代名詞によってつけられた短い序文のような文章におけるマウラーナー・シャイフに対する祝福句は故人に対するそれである。1510年頃のことであろう。

また、著述の年代からすれば、著者マウラーナー・シャイフは他の二人の高弟による師の上述の聖者伝①②を見ることが可能であったはずなのだが、参照した形跡はない。また、この二つの聖者伝を参照してすでに書かれていた③『ラシャハート』も見えていない。

5) 内容

上に述べたような成立事情により、当書はほとんど編集の手が加えられていない1次資料の集積として残された。『ラシャハート』のような形の整えられた聖者伝と比較するとますますその感を強くする。

校訂者・訳者としては、当書の一字一句までもが15世紀の中央アジアの聖者の写真の一つひとつの粒子のように思われ、どの部分も重要であるのだが、歴史研究者として特に重要とおもわれ内容を挙げておこう。

まず、ティムール朝期の政治的事件とホージャ・アフラルとの関わりである。それは、1451年のティムール朝アブー・サイード・ミールザーのマー・ワラー・アンナフルの征服の時から、1500年シバーン朝シャイバーニー・ハーンの第一回目のサマルカンド征服の時期までつづく。ホージャ・アフラルの死後においても彼の霊は影響を及ぼし続けていた。第一回目のシャイバーニー・ハーンの征服の直後に彼からサマルカンドを奪い返したティムール朝ザヒール・ウッディーン・バーブルは急襲の前に勝利を約束するホージャ・アフラルの夢を見た彼の回想録に記している。

1461年から63年にまで続くムハンマド・ジュキーの反乱における当書に描かれたホージャの役回りは今日まで全く知られていなかったものである。また、当書では1490年のホージャ・アフラルの死後に起こったことになっている「チル川の戦い」は、通説では1488年となっている。しかし、通説の年代の根拠は、当書より30年以上後に書かれた『ターリーヘ・ラシーディー』なのである。

1496年初夏の「タルハン族の反乱」についての当書の記述は具体的で、バーブルによる同じ事件の記述に引けを取らない。両者はほぼ一致するが、細かな部分の相違は多い。

1500年の「ムハンマド・ヤフヤーとその子供たちの殉教」は、明らかに事件の当事者の証言で、あまりの壮絶さに息をのむ。

また、聖者伝として特に興味深いのは、主に第三章に出てくる若いころのホージャ・アフラルとその師であったスーフィーたちとの関わりである。訳注の解題で補う必要があったほど短い逸話ばかりではあるが、その記述は若きホージャ・アフラルの目指したスーフィー聖者とはどういったものであったかを示しているように思われた。

また、同じく第三章のホージャ・アフラルによって語られる過去のスーフィーの逸話や彼らの言葉の解説は15世紀の中央アジアの人びとの抱いていた思想としてのイスラム教やスーフィズムの有り様を示している。特に興味引かれたのは、シャイフ・ヌール・ウッディーン・バシルやブルハン・ウッディーン・サーガルジーなどの中央アジアにおいてしか知られていない聖者たちについての逸話である。それらは、すでに15世紀には逸話として語られていたのである。

論文審査の結果の要旨

通称ホージャ・アフラル、正確にはホージャ・ナースイルッディーン・ウバイドゥッラー・アフラル（1404-1490）は、中央アジアで形成されたナクシュバンディー教団の中興の祖と目される指導者であり、彼の系譜に繋がるシャイフたちは、中央アジアのみならず、アナトリア、インド、中国西部、インドネシアにまで教線を拡大した。ホージャ・アフラル

は、教団内部において神秘主義思想とその実践を教授する宗教指導者であったが、同時にティムール朝の諸王子に対し大きな政治的影響力を持ったのみならず、広大な農地とサマルカンドやブハラなどの都市に膨大な不動産を所有してもいた。長年にわたってティムール朝の政治史と社会史、就中政治・社会と神秘主義教団との関係についての研究を継続して来た論者は、自らの研究の根本史料のひとつである『ホージャ・アフラルのマカーマート』（マカーマートとはスーフィズムの用語としては普通修行者の到達した「諸階梯」を意味するが、同時にその「諸階梯」の驚異の記録、即ち、聖者の言行録もしくは伝記の意味でも用いられる）のペルシア語テキストを校訂し、翻訳と注釈を施して、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の継続出版物である *Studia Culturae Islamicae* の第78、80集として刊行し、これを学位申請論文として提出した。本論文に対する評価は以下の諸点に要約される。

(1)ホージャ・アフラルの伝記として現存するものは、本作品を含め4点である。本作品は、その著者がホージャ・アフラルの財産管理の任にあった人物であると思しく、断片的ながらこの方面に関する記述を多く含む点に特色を有する。論者は現存する写本5種（タシュケント3、イスタンブル、パトナ）に基づき、イスタンブルとパトナ写本による刊本を参照しつつ、最も信頼性の高い校訂本を作成した。

(2)本作品は、著者が取り集めていた心覚えを適宜配列したものであろうとの論者の見解は正鵠を射ていると思われるが、まさにそうした成立の事情の故に、本作品には生硬で理解困難な文章も少なくない。これを解釈し理解可能な日本語に移したことは、論者の言語的能力の高さを証明する。

(3)本作品に言及される人名や地名、諸々の政治的事件、社会経済にかかわる用語などについて付された注釈は極めて詳細であり、本作品の内容を理解するためのみならず、ティムール朝末期の歴史研究にとっても大いに有用である。ここには長年にわたる論者の研究の蓄積が遺憾なく発揮されており、本論文の成果としてもっとも高く評価すべき点である。

(4)長短様々なおよそ二百の逸話の集成である本作品は、雑多かつ断片的ではあるがホージャ・アフラル自身とその時代に関する情報の宝庫であり、師弟の関係、政治権力者との交渉、定住民と遊牧民、手代を通じての農地管理、食物、衣服、更には80歳を過ぎたホージャ・アフラルの旺盛な性生活に至るまで実に様々な記述が含まれている。が、そこで最も顕著であるのは、著者およびその同時代人が、生前と同様死後も聖者が保有する霊的能力に対して抱いた畏怖の感情であり、これこそが聖者が政治権力に与えた影響力の源泉であると考えられる。本作品は中央アジアの心性の歴史を考察する上で今後とも必須の史料とされるであろう。もろもろの史料の内から本作品を選んで公刊した論者の着眼の的確さは高く評価されるべきである。日本語によるこうした分野の文献の公刊は、本論文が最初である。

(5)訳注編の解題において、『ラシャハート・アイヌルハヤート』に含まれるホージャ・アフラルの伝記から特にその経歴に関する部分を抄訳・紹介したことは、本作品の理解に資するばかりでなく、聖者の略伝として有用である。

以上のように高く評価される本論文ではあるが、もとより若干の瑕瑾を免れるものではない。出来る限りペルシア語原文に忠実な訳を心がけたため、僅かではあるが意味の取りにくい訳文があること、翻訳の人名が原文と相違している例が二三みられること、とくにスーフィズムに関する用語の訳については今一段の検討が必要なことなどが問題のうちに数えられる。さらに本論文公刊の段階における問題ではないが、本作品に見える諸事件のいわば神秘主義的な解釈と、論者が扱ってきた王朝の年代記などのより醒めた記述とのあいだを如何に架橋するのか、言い換えれば、聖者伝などの宗教文献を歴史史料として用いるための方法論は何かという問題は、論者の今後の研究課題となるであろうと思われる。

以上、審査したところにより本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2006年6月6日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。